
ちみっこ団と三つ子と召喚獣

レフェル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ちみつこ団と三つ子と召喚獣

【Nコード】

N7719W

【作者名】

レフェル

【あらすじ】

GAU様から借りたひばりとその母親の美空と糖分さんと暁さんFOOLさんから借りたキャラを参加させて。ちみつこ軍団にいておもしろおかしく盛り上げていきたいと思います。

オリキャラ×オリキャラ、オリキャラ×原作キャラでいきます。

これ前の作品のリニューアルです！

新キャラ参入するかも？

登場作品とキャラ紹介（前書き）

新規リニューアル作品です。

色々悩みながら執筆していききたいと思います！

登場作品とキャラ紹介

登場作品紹介！

「バカと雲雀と召喚獣」から、『支倉ひばり』と『支倉美空』をお借りしてます。

「バカとのんきと召喚獣」から『月野造』をお借りしてます。

「バカとドアホと凶悪な顔」から『山崎巧』をお借りしてます。

登場キャラ紹介！

新条ありす

- ・身長：136cm
- ・性格：明るく元気で優しい
- ・容姿：水色のツイン・テールで紫色の瞳。
- ・超能力：【空間転移^{テレポート}】
- ・LV4の【テレポーター（空間跳躍者）】
- ・体型：小柄でつるぺたで低身長
- ・コンプレックス：胸
- ・得意科目：数学
- ・苦手科目：英語

支倉ひばり

- ・身長：138cm
- ・性格：健気で頑張り屋で誰にも等しく優しい

- ・容姿：黒髪のポニーテールで黒色の瞳。胸はFカップ
- ・特技：声真似と料理
- ・明久の幼なじみでもあり、瑞希の幼なじみであり、つぐみの幼なじみ。
- ・コンプレックス：低身長と胸
- ・得意科目：家庭科
- ・苦手科目：特になし
- ・成績：Cクラス並
- ・作者：GAU様

雨宮つぐみ

- ・身長：138cm
- ・性格：健気で優しくて友達思い
- ・容姿：茶色のツインテールで鈴付きリボンをつけてる。瞳の色は茶色。胸はEカップ
- ・特技：明久を起こすこと？
- ・明久とひばりの幼なじみで、瑞希の幼なじみ。
- ・コンプレックス：身長
- ・得意科目：家庭科
- ・苦手科目：別がない
- ・成績：Cクラス並

秋月終夜

- ・身長：180cm
- ・性格：基本、友と幼なじみに優しく、敵には容赦がない。
- ・容姿：黒髪の少し短髪で瞳は黒色。
- ・美波の幼なじみ
- ・一人称：俺

・備考：小さい頃はドイツに住んでいたけど、両親の都合で引越して日本にきた。

・趣味：サッカー、合気道、剣道、料理。

・得意科目：数学、英語、物理

・苦手科目：化学、歴史

・観察処分者。

相沢綾菜

・身長：186cm

・一人称：わたし

・容姿：文月最強のバストサイズ。

髪はミルク多めのミルクティーのような色で、ふわふわした癖のあるロングヘア。

少し眠そうな表情が特徴的な美人ではあるものの、どこか幼い童女のような印象を与える。

・性格：純真無垢で、赤ちゃんはキャベツから産まれてくると本気で信じている。

・学力：Cクラスレベル。保健体育は零点をとるくらい

・備考：小さい頃は小柄で体が弱かったが、

どんどん成長して頑丈な体と誰にも負けない健康体を手に入れた。

なぜか、とんでもない怪力の持ち主で、鉄筋をアメ細工のようにグニャグニャに曲げたり出来る。

性知識は完全にゼロで説明されても理解できない。

将来の夢は、『こーちゃん（ムツツリー二のこと）のお嫁さん♪』と笑顔で言い切る。

ムツツリー二を抱きしめるのが大好きで、スキあらば抱きつこうとするが、

生命の危機に直結するため、よく避けられている。

あまりやられると、子供のように泣き出して、手が着けられなくなる。

・召喚獣：笑顔を浮かべた天使だが、なぜか武器は釘バット。
ひばりとつぐみを抱きしめるのが好き

山崎巧

- ・容姿：目付きが悪く鋭い目をしており、顔立ちはまあまあ良い。
- ・性格：明るくて頼もしい、兄貴みtainな存在
- ・口調：関西弁
- ・作者：暁巧様から、借りました♪

吉井冬久

- ・容姿：茶色のショートで少し襟元に後ろ髪がかかるくらいあり。
目は切れ長で顔立ちは明久と少し似ている背丈も同じくらいある方。
- ・性格：悪戯好きだけど、仲間思い。
- 根は明久譲りの優しいところがあり、シスコン（真希限定）であり
ブラコンでもある。

・一人称：俺

- ・成績：Cクラス並かな
- ・備考：吉井家の三つ子で明久の弟であり、真希の兄。
ひばりに好意を寄せている。予知夢をよく見るらしい。

吉井真希

- ・容姿：9巻のアキちゃんそっくりの容姿で。
- ・性格：元気で明るくて優しいけど、ブラコンである
- ・一人称：わたし
- ・成績：Bクラス並
- ・備考：吉井家の三つ子の末っ子でひばりと冬久の仲を応援している。

つぐみと明久がくつつくのも応援しているとか。
超能力者で多重スキル使い？

・得意科目：数学

月野造

- ・年齢：17歳 誕生日：8月13日
- ・性別：男
- ・身長：148cm（自己申告）実際は145cm
- ・体重：42kg
- ・性格：のんき やや天然
- ・趣味：お茶を飲むこと、昼寝、お菓子作り
- ・特技：特になし、あえて言うとな人の顔と名前を（瞬時に）覚えることと掃除
- ・好きなもの：友人、先生、甘いもの、努力
- ・苦手なもの：わんこ・にゃんこ、機械、辛いもの
- ・外見：童顔で未だに中学生、最悪小学生と間違われる。中性的なルックス。

男性にしては長い黒髪

支倉美空

- ・容姿：ひばりをそのまま大人にした感じで髪をおろしています。
 - ・性格：基本的に優しい母親明るくお茶目で悪戯好き。
 - ・特技：声真似と演技の悪戯
 - ・備考：家事は人並みだけど、ひばりには劣る
- ひばりと父と一緒に住んでいる。
- 仕事が忙しく、留守にしていることが多いですが、娘のひばりを溺愛していて、
- 『ひばり分』を補充しにきます（笑）
- 明久達のこともお気に入り、息子と娘のように可愛がっている。
- ・作者：GAU様

風宮紅葉

- ・容姿：かりんに似た容姿で可愛い

・性別：男

・性格：のんびりで優しくて友達思い

・成績：総合成績は高い

・得意科目：歴史等の暗記物

・苦手科目：保健体育など

・呼び方：綾菜↓あやちゃん、ありす↓あーちゃん

真希↓まーちゃん、雪菜↓ゆきちゃん。

明久↓アキくん

秀吉↓秀くん

優子↓優ちゃん

瑞希↓瑞希ちゃん

翔子↓翔子ちゃん

康太↓康くん

愛子↓愛子ちゃん

雄二↓雄くん

冬久↓ふゆくん

つぐみ↓つーちゃん

ひばり↓ひーちゃん

造↓つつくん

巧↓たっくん

坂本雪菜

・容姿：白い白銀のようなロングヘアで真紅の瞳。とても可愛い

・性格：大人しめで優しくてブラコンで世間知らず。

・一人称：わたし

・備考：体が弱いので入退院を繰り返していた。

勉強は大体兄達と紅葉に教えてもらっていたのでDクラス並。

紅葉に想いを寄せている。

坂本家の長女。

新条怜次

- ・容姿：赤い髪で首辺りまで髪が伸びており、そこで紐を結んでいる。瞳は茶色
 - ・性格：負けず嫌いだけど気まぐれ屋でシスコン
 - ・一人称：わい
 - ・成績：Bクラス並
 - ・得意科目：数学と英語
 - ・苦手科目：日本史かな？
 - ・備考：ありすの兄で翔子に想いを寄せている。
- 翔子と雄二の幼馴染。

芳乃朋^{よしのも}

- ・性別：女
- ・身長：144cm
- ・体重：34kg
- ・年齢：17才
- ・一人称：僕
- ・Fクラス所属
- ・容姿：金色のロングヘアのツインテールで赤色の瞳。
- ・性格：やや天然で、お気楽思考
- ・備考：本来は三年だが、二年生として在籍している。理由は不明
- ・得意科目：数学、物理、化学
- ・苦手科目：保健体育
- ・召喚獣：東方の魔里紗に似てる。魔法使いの衣装着てる。

藤堂辰也

- ・性別：男
- ・身長：186cm
- ・特技：剣道と空手

・ 一人称：僕

・ 容姿：赤色のショートヘアで紫色の瞳でイケメン。

・ 備考：成績はAクラス並。

Fクラスに行ったのは面白そうだからという理由で、テストを白紙で出したのが原因。

剣道部主席でエース的存在。

暇な時は剣道部に行き鍛練している。

色恋事に疎くて鈍感。

どこからともなく竹刀を出してFFF団の攻撃をしりぞく。

瑞希の幼馴染。幼いころからの仲。ひばり達とも幼馴染となっている。

・ 得意科目：すべて

・ 苦手科目：特になし

・ 召喚獣：顔はデフォルメされた辰也で服装は着物で獲物は刀。

愛刀『鬼斬丸』を持つてる

ブローグ いつものゆるりとした日常

『ねえねえ。あきくん、ふゆくん』

『なーに、ひーちゃん?』

『どうしたの? ひーちゃん』

『おつきくなったらどっちがおよめさんにしてくれる?』

『おれがひばりちゃんをおよめさんにしてあげる!』

『ほんと? やくそくだよ!』

『ひーちゃんとふーくんはなかよしだね』

『うん。あ、つぐみはぼくのおよめさんになってね?』

『ふえ? うん、やくそくだよ』

『たつくんはあたしをおよめさんにしてくださいね?』

『オレでええなら、いいで』

『もちろんです』

ジリリリリ!

ここで吉井冬久の目が覚める。

「夢…か。幼いころだし、事項だよな」

複雑そうに呟いてから。目ざましを止めて俺は布団から出ようとすると

バン！

「冬久！なんで、オレの部屋に真希ちゃんがおんねん！？」

「あ、そっちに行ってたんだ」

ドアが開き、幼馴染の一人の山崎巧が俺の部屋に入ってきた。

俺と三つ子の兄明久の妹真希は幼馴染の一人の巧にいたずらするところが好きでたまに忍び込むことがあるそうだ。

これも好意があるからできると末っ子の真希は言っていた気がするな。

「どうしてもよさそうに言うなや！」

「だって、巧なら別にいいかなって」

まだ寝起きだからぼけっとしているので俺が言うと巧は突っ込みをいれた。

「冬久、僕は認めてないよ？」

「あれ、アキ兄。なんで覇王のオーラをまとってんの？」

「ち、違うんや！明久、オレは連れ込んだわけじゃ！」

吉井家の長男で俺の三つ子の兄である吉井明久。
真希とつぐみとひばりのことになる豹変することがあるらしい。
現にその片鱗があるわけで、だから巧が怯えているんだよな。

「遺言はそれだけ？」

「本当なんや！」

ニツコリと笑ってアキ兄が巧に近寄って言う。
てか、俺の発言は無視ですか？
悲しくないもん。

「いいかげんにしなさい！」

ぴこん！

「いたいよ、つぐみ」

可愛らしい声が響いてアキ兄の頭が叩かれるとアキ兄が振りむいて
幼馴染の雨宮つぐみを見る。

「痛くしてるんだから、当然でしょ！」

「でも、巧が」

「でも、ストもないよ！アキ君」

腰に手を当てて怒るつぐみが言うとアキ兄はまだ納得がいかないよ
うに言おうとすると

支倉ひばりが隣に来て呆れながら言った。

「あ、義姉ちゃんズ降臨した！」

明るい声が聞こえたのでそちらを向くと真希が立っており、笑顔で言った。

こんな騒動を起こしたのに悪気もないのか。

「どうしてこうなったかは予想はついてるけど、今回はやりすぎだよ？」

「うう、ごめんなさい。」

つぐみが呆れながら言うとしゅんとしたように真希が謝る。

ひばりつつぐみに叱られると子犬のように落ち込んでしまう。それは信頼しているからだろう。

「もう、しない？」

「うん！」

ひばりがきくと真希は笑顔で敬礼して返事をした。

これなら巧も大丈夫だな。

この後、制服に着替えてひばりつつぐみが作った朝食を食べる。

そしてみんなでマンションから出るときに美空さんが出てきて

「ちょっと待って！ひばり分が足りないから」

「ちょ、お母さん!!?」

そう言うとひばりを抱きしめた。ひばりは当然焦っていたけどほのぼの空間が展開されていた。

しばらくひばりを抱きしめていた美空さんが離れると俺とアキ兄と真希とつぐみと巧を抱きしめてきた。

「みんな可愛い〜」どっちがお嬢さんになってくれるのかしら

「お母さん!あたし達まだ高校生だよ!?そんなの早いからね!」

にこにこと笑って言う美空さんにひばりは焦りながら言った
そんなひばりを見ても可愛いと思える俺は重傷かもしれない。

「あはは、相変わらずだね。ひばりのお母さんは」

「でも、楽しい人だから、あたしは好きだよ」

アキ兄は笑顔で言うつつぐみはにこにこと笑って言った。

「みんな、そろそろ行かないと!」

「そつや!こんなことしてる場合やない!」

真希が焦りながら言うと巧も焦って走り出した。

俺とアキ兄と真希とひばりとつぐみも慌てて追いかける。

ブローグ いつものゆるりとした日常（後書き）

いつもの日常を書いてみたけど

大丈夫かな？

第一話（前書き）

今回は真希視点です!!

第一話

真希 side

ただいま、学園に向かって全力疾走しています。
今回は吉井家の三つ子の次女が担当したいと思います!!

「はあはあ、みんな。大丈夫ですか？」

「僕は大丈夫だけど」

「俺も大丈夫」

「オレもや」

走りながらあたしがきくとアキ兄とフユ兄と巧くんが答えてくれました。

でも、ひばりちゃんをつぐみちゃんが心配なようです。
当然、あたしも心配ですので振り向いて

「ひばりちゃん、つぐみちゃん。大丈夫ですかー？」

「はあ、ふう…だ、大丈夫！」

二人は小柄な上に、運動が苦手で体力がないため、すでに限界のようです。

うーん、あたしが二人を瞬間移動で連れていくのもいいでしょうけど、二人は拒みそうですし。

「ひばり、俺の背中に乗りなよ」

「つぐみも！」

あたしが迷っていると、途中でアキ兄とフユ兄が立ち止まり、背中をむけてしゃがみ込みました。
本当によく似てますよね。そういうところも。

「「え、でも」」

「「いいから！」」

戸惑う二人にアキ兄とフユ兄はきっぱりと言いました。
こうまでするとこでも動きませんからね。

ひばりちゃんとつぐみちゃんは、はあ。とため息をつく、恐る恐るアキ兄とフユ兄におぶさった。
詳しくいうとひばりちゃんはフユ兄の背につぐみちゃんはアキ兄の背におぶさりました。

「真希ちゃんは大丈夫やね」

「当然です！」

うらやましそうに見てはいたら巧君に言われてとっさに答えてしまいました。

うう、あたしのバカ！！

「行けるか、明久に冬久」

「「大丈夫」」

巧君がアキ兄とフユ兄に聞くと二人はニヤリと笑って答えた。
どこまでも気が合う三人ですね。

そして、ここから再び走りました。

アキ兄はつぐみちゃんを背負ったまま、フユ兄はひばりちゃんを背負ったままで。

あたしと巧君はそのまま走りました。

しばらくして、校門にたどり着くと、人影が見えてきました。

「遅刻だぞ、吉井兄妹、支倉、支倉、山崎」

ドスの効いた声で呼び止められました。

声のした方を見ると、そこには浅黒い肌をした短髪のいかにもスポーツマン然とした男が立っていました。

そしてその隣には身長がひばりちゃんやつぐみちゃんより高い、多分145cmの男の子がいました。

その男の子の隣に、144cmの少女がいました。

「おはようございます、鉄じ……西村先生」 ↓アキ兄

「「おはようございます」西村先生」 ↓ひばりちゃん&つぐみちゃん

「おはようございます、アイロンマン先生」 ↓フユ兄

「おはようございます、西鉄先生」 ↓あたし

「鉄……西先生。おはようございます」 ↓巧君

アキ兄があだ名でいいかけそうになったので慌てて直して言い、ひばりちゃんをつぐみちゃんは笑顔であいさつしました。

次にフユ兄が完全あだ名であいさつして巧君も思わずあだ名でいいそうになつて直すも珍妙な名字になってしまいました。

ちなみに校門前にいたのは、生活指導の鬼。西村教諭です。

ひばりちゃんをつぐみちゃんの状態には触れずに

「お前ら、坂本と同じようにはなるなよ」

「「気をつけます」」

西村先生はアキ兄とフユ兄を見てどこか懇願するように言いました。
なにがあつたんですか？

「支倉、今回は残念だったな。理由はあれどルールはルールだからな」

「まあ、仕方ないですね」

そう西村先生は言うつと封筒を取り出してひばりちゃんに渡しました。

「雨宮も残念だったな」

「体調管理ができてなかったですから仕方ないですよ」

西村先生はつぐみちゃんにも封筒を渡して次はあたしの番ですね！

「吉井妹、いくら兄といたいからって…白紙にすることはないだろ」

「先生！ひばりちゃんがつぐみちゃんもいるから白紙なんです！」

頭を押さえてあたしに言う西村先生にきっぱりというひとひばりちゃんがつぐみちゃんが呆れた目で

こちらを見てました。

なぜゆえ？

「「すいません、西村先生。後で僕等が言っておきますから」」

「許したってください」

なぜか、アキ兄とフユ兄と巧くんが謝っていました。

あれ、どうしてなんででしょうか？

「苦勞するな」

「「「慣れました」」」

どこか同情めいたように西村先生がアキ兄達に言い、封筒を渡しました。

アキ兄とフユ兄と巧くんが封筒を開けようとしていると

「吉井兄に吉井弟に山崎。苦勞してるからといって点数をおろそかにしても意味はないからな」

西村先生はそう言うところとちょうど三人が封筒を開けて中身を見るところだった。

吉井明久…Fクラス

吉井冬久…Fクラス

山崎巧…Fクラス

「先生、その隣にいる二人は」

「ああ、月野と芳乃だ。自己紹介していいぞ」

ひばりちゃんが聞くと西村先生は隣にいる二人を見て言いました

「えっと、月野 造です。留年して2・Fクラスに所属することになりました。」

ついでに言うとお察処分者です、これからよろしくお願いしますね、皆さん」

とにこやかな笑顔で言いました。

秀吉君と紅葉くんと似たタイプですね。

「僕は芳乃 朋です。同じく留年して2・Fクラスに所属することになりました。」

特別処分者というのものです、これからよろしくお願いね」

こつちも笑顔で言った。

確か、彼女はここのシステムも担当していたんじゃないかなかったですよ
うか。

なんだか、楽しくなりそうです

朋ちゃん、造くん。仲良くしましょうね！

第一話（後書き）

余談

「中学生じゃないんだね」

「ひばりとつぐみ以外にもいるとは」

「世の中は狭いんやね」

明久と冬久と巧が芳乃と月野の自己紹介を聞いて思っていたとか。

バカテスト 第1問

問題

『調理の為に火にかける鍋を制作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。このときの問題とマグネシウムの代わりに用いるべき合金の例を1つあげなさい』

姫路瑞希と雨宮つぐみと支倉ひばりの答え

『問題点……マグネシウムは炎にかけると、激しく酸素と反応するため危険であるという点
合金の例……ジュラルミン』

教師のコメント

正解です。

合金なので鉄ではダメと言うひっかけ問題なのですが、

姫路さんと雨宮さんと支倉さんは引っかけりませんでしたね。

土屋康太の答え

『問題点……ガス代を払ってなかった事』

教師のコメント

そこは問題じゃありません

吉井明久の答え

『合金の例……未来合金（↑すごく強い）』

教師のコメント

すごく強いと言われても

吉井冬久の答え

『問題点……マグネシウムを選んだ点』

教師のコメント

そついう問題じゃないんですけど

月野造の答え

『問題点……空気中で加熱すると炎と強い光を発して燃焼するから合金の例……そもそもマグネシウムでは鍋は作れません』

教師のコメント

……まあそうですね。

新条ありすの答え

『問題点……マグネシウムは炎にかけると、激しく酸素と反応するため危険であるという点
合金の例……ジュラルミン』

教師のコメント

正解です、理数系が得意なだけはありませんね。

芳乃朋の答え

『合金の例……賢者の石』

教師のコメント

わざとですか？

山崎巧の答え

『問題点 …… 花火するつもりで実行したから

合金の例 …… スチールウール（別の色が楽しめる）』

教師のコメント

花火をするつもりでって、どれだけ物語を膨らませているんですか。
…… 花火から離れてください。

吉井真希の答え

『問題点…… マグネシウムで花火をしたいから！』

教師のコメント

山崎君と同じ答えはやめてください

風宮紅葉の答え

『問題点

酸化マグネシウムの生成の際、激しく発光してしまう。その際、
水をかけると、余計大惨事になる。

合金の例 オレイカルコス』

教師のコメント

遊戯王は先生も好きです。

第二問

巧 side

Aクラスの教室前にきたらオレ達は驚愕したんや。

「うわ〜……大きい教室」↓ひばりちゃん

「こんなに大きい教室あつたんだね」↓明久

「ありえねえ」↓冬久

「ひ、広い」↓つぐみちゃん

「すごいですね〜」↓真希ちゃん

去年はほとんど来たことのない三階に足を踏み入れると、まず目の前に現れたのは通常の五倍はあろうかという広さを持つ教室やった。

その教壇に立つにはクールで知的な大人の女性の高橋洋子先生が居たんや。

黒板ではなく壁全体を覆うほどの大きさのプラズマディスプレイには高橋先生の名前が表示されていた。

「「学年主任の高橋先生か、知的で大人の雰囲気か素敵だな〜。」」

ひばりちゃんをつぐみちゃんは知的美人には憧れを抱いてるようや。

その一方で明久はAクラスの設備に目移りをしていたみたいやけど。

「うわっ！席広っ！エアコンにパソコンに、あ！冷蔵庫まであんの！？」

「システムデスクにリクライニングシート…あれじゃ、教室というよりホテルだな」

この設備には冬久も苦笑いを浮かべるしかないようや。

「では、はじめにクラスを代表を紹介します。霧島翔子さん。前に来てください」

「……はい」

名前を呼ばれて席を立ったのは、黒髪を肩まで伸ばした日本人形のような白い肌を持つ少女。

物静かな雰囲気を持つ彼女は、その整った容姿と相まって、穢れを近づけない神々しさを放っていた。

「……霧島翔子です。よろしくお願いします」

先ほどと同じようにプラズマディスプレイに大きく名前が表示された。

「綺麗な人…」

「羨ましいね」

ひばりとつぐみは霧島を見て羨ましそうにしていたんや。どちらかというと二人も可愛いとオレは思うやけど。

「ひばり？ つぐみ？」

「どうかしたのか？」

明久と冬久は不思議そうにひばりとつぐみに話しかけたで。

真希ちゃんも静かやけど、どないしたんやろ？

気になって隣を見ると携帯でメールを送っていたんや。

誰に送ってるんやろ

「さて、アキ君、フユ君。そろそろ行こう？」

「みんな、揃ってるかもしれないしね」

ひばりとつぐみは元気良く言うと明久と冬久を置いてそそくさと歩き出した。

「あ、うん」

「行くか」

「あ、待ってくださいーい！」

「オレらも行くで！」

明久と冬久は頷くとひばりとつぐみをおいかけに行き、オレと真希ちゃんも慌てて追いかけたんや。

つぐみ達が教室内に入ると

「雄二」

「ありすは可愛いな」

目に入っただのはいちゃつくバカップル。

坂本雄二と新条ありすだ。今日も甘さ全開のようやね。

教壇で頭を抱えているのはいちゃつくバカップルの幼なじみであり、新条怜次。

ありすちゃんの兄貴や。彼も以外と苦勞していたりするらしいで。

「おはよう、怜次」

「おう、はよ。明久に冬久。支倉と雨宮と真希ちゃんと巧」

明久が怜次に話しかけると怜次は顔をあげてニカッと笑って明久達を見て言ったんや。

「ところで、雄二はいつから？」

「今朝からずっとだ」

明久はふと気になって怜次に聞くとげんなりした表情で怜次は答えた。

どうやら、ラブラブ空気に当てられて疲れているようやった。

「怜次君が教壇に立ってるということとは」

「そうだ。俺が代表だ」

つぐみは怜次を見て言うのとニヤリと笑って言うた。

ま、雄二があのもんちゃ狼モードだから無理もないやろう。

「ここって、本当に教室なの？」

「教室じゃなくて、廃屋みたいだな」

ひばりは蜘蛛の巣を見ながら言うのと冬久も周りを見て言う。

このままだと、体調を崩す人が出るのではないかと思っほどだ。

「えーと、ちょっと通してもらえますかね？」

呆れている奏太達の後ろから覇気のない声が聞こえる。

振り向くとそこには寝癖のついた髪にヨレヨレのシャツを貧相な体に着た、いかにもさえないおっさんがいた。

「それと、席についてもらえますか？ H Rをはじめますので」

どうやら担任教師が到着したようだ。

「あ、はい」

「了解」

「わかりました」

返事をしてから奏太達は自由に席に座ることにした。

「えー、おはようございます。二年F組担任の福原慎です。よろしくお願いします」

福原先生はお世辞にも綺麗とは言えない黒板に名前を書こうとして、やめた

「あれ、なんで黒板に書かないのかな？」

「ああ、それか。俺が教壇に立った時にみたら、チョークのくずしかなかった」

つぐみが不思議そうにしていると怜次が答えた。

その状態に苦笑いをこぼす、明久とつぐみとひばりと冬久。

「ここは改善を要求したいですね」

「それに関しては同意見や」

真希ちゃんがそう呟いて言うのでオレも同意した。
後で直談判するべきやろうな

バカテスト 第二問

問 以下の意味を持つことわざを答えなさい。

『(1) 得意な事でも失敗してしまう事』

『(2) 悪いことがあった上に更に悪いことが起きる喩え』

姫路瑞希・月野造と芳乃朋と支倉ひばりと雨宮つぐみの答え

『(1) 弘法も筆の誤り』

『(2) 泣きつ面に蜂』

教師のコメント

正解です。他にも(1)なら『河童の川流れ』や『猿も木から落ちる』、(2)なら『踏んだり蹴ったり』や『弱り目に祟り目』などがありますね。

土屋康太の答え

『(1) 弘法の川流れ』

教師のコメント

シュールな光景ですね。

吉井明久の答え

『(2) 泣きつ面蹴ったり』

教師のコメント

君は鬼ですか。

島田美波の答え

『(2) ふんだんにけつたり』

教師のコメント

あなたもですか……

吉井冬久の答え

『(1) 雄二の川流れ』

教師のコメント

あなたは坂本君に恨みでもあるんですか？

第三問

造side

「必要な物があれば極力自分で調達するようにしてください」

どこからともなく、教室全体からかび臭い独特の空気が漂います。きつと床に敷き詰められている古い畳のせいでしょうね。後で少しだけ学園長の力でも借りましょうかね。

「では、自己紹介でも始めましょうか。そうですね。廊下側の人からお願いします」

福原先生から指名を受け、廊下側の生徒の一人が立ちあがり名前を告げました。

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる」

男子の制服を着た可愛い女子がそう言いました。

確か、演劇部の期待の新人さで稀代の美少女・性別を超えた人だと言われていましたね。

ツネが興奮気味に言っていましたね。あの後、朋さんの餌食になりましたけど。

真っ白に燃え尽きていたので、なにがあったか聞いたら。ガタガタとツネが怯えていました。

何をしたんですか、朋さん。

「こう見えてワシは男じゃ。」

「え!？」

「そうなの!？」

自分が考え事していると全員にはちゃんとっておかないといけな
いみたいに彼はいいました。

雨宮さんと支倉さんはこのとんでも発言に驚いていました。

そこまで驚くことなんでしょうか？

それにしても彼とは気が合いそうですね。

「じよ、冗談だよね」

「そ、そつだよ！悪い冗談だよね」

「気持ちわかるが。あいつは男だ」↓ 怜次

雨宮さんと支倉さんは新条さんのお兄さんに聞くと苦笑いされなが
ら言われてました

もう一回その男子を見るとどうみても女子にしか見えない容姿です。

ちらつと、吉井君を見ると悶えていました。

その弟の冬久君が呆れてみていたのはなぜでしょうか？

山崎君までもなにかを耐えるようにしていたのが見えましたけど。
真希さんに抱きつかれて我に返ってしまいましたね。

「と、いうわけじゃ。今年一年よろしく頼むぞい」

こちらこそよろしく願います。

おっと、次の人が立ち上がりましたね。
いったい誰でしょうか？

「坂本雪菜です。副代表の坂本雄二とは双子の兄妹ですよ、よろしくお願いします！」

かなり緊張しているみたいですね。
気を張りすぎると失敗しまあつ

ズデン！

「あうう」

どうやら足を滑らしたみたいですね。
あ、誰か雪菜さんに近寄っていますね。

「大丈夫？雪ちゃん」

「う、うん。なんとか」

心配そうに声をかけたのはこれまた美少女といわれかねない男子でした。

彼とも気が合いそうな気がします。

確か、彼もツネが興奮気味にしていましたね。
坂本兄妹とは仲が良いという話も聞きます。

「モミジ、心配かけてごめんね？」

「ごめんはいらないよ。僕が好きでしてるんだからね」

申し訳なさそうに雪菜さんが言うと紅葉くんと呼ばれた男子は笑顔でいつてのけました。
なんだかほのぼのしますね。

「雪菜、紅葉」

「あ、雄君！雪ちゃんなら怪我はしてないよ？」

おや、坂本君が近寄ってきたみたいですね。
心配なんですね、やっぱり。

「良かった！雪菜ちゃんに怪我がなくて。もし、してたら…どうしてくれよう」

「あ、あの。わたしなら大丈夫ですから！」

坂本君の隣には新条さんが来て安心したように言い、最後は黒い笑みで笑ってました。
それを見た雪菜さんが慌てて止めるようにいいます。
なんだか大変そうです。

「ありす。それは最終手段だ」

「それもそうだね」

坂本君は止めるきないんですか！！？

「それも違う気がするよ！？てか、止めようよ！…！」

「雄兄も義姉ちゃんをあおらないで！」

それを聞いた紅葉君と雪菜ちゃんがまた慌てて言いました。
苦勞しますね、彼ら。

「次の人の自己紹介してもいいですか？」

「あ、すみません。続けてください」

先生が坂本君達に聞くと紅葉君が苦笑いしながら答えました。
お疲れ様です！

そんなやり取りが終わると次の人が立ちました。

「……………土屋康太」

人のことは言えませんが、ずいぶん小柄で無口な方ですね。Fクラスにしてはおとなしめな方です。

そういえば、彼より背が高い少女と見かけたことがありましたね。
名前は覚えてませんけど。

自分や木下君や紅葉君の写真を撮っていることが多かったのも覚えて
います。

撮ってもおもしろくもないと思うんですけど。

むしろ、一緒にいる彼女さんの写真を撮ればいいでしょうに。

「新条ありすです！得意科目は数学と物理と化学！苦手科目は日本
史です

隣にいる坂本雄二とその妹の雪菜ちゃんと風宮紅葉くんとは幼馴染
の仲です」

ガタツガタツ！

おや、誰かが立ち上がった音がしますね。
それにしても、男子だけじゃないんですね。
ちゃんと女性もいてなによりです。

「あ、雄二に手を出したら全員、空に【空間転移】
させるから、その辺よろしくね」
テレポート

と、笑顔で言って座りました。
それを聞いたらすぐに座る人が続出しましたね。
なぜでしょう？

「島田美波です。海外育ちですけど、日本語は会話できるけど、読
み書きは少し苦手です」

帰国子女ですか、読み書きと日本語は血のにじむような努力をした
んでしょうね。

「あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツだったので。趣味はあり
ません」

笑顔で島田さんが言うところと誰かを見たような気がしました。
誰かを探しているんでしょうか？

「秋月終夜です。海外育ちだったけど、幼い頃にこっちに引っ越し
てきたんで。
日本語もちゃんと話せます。読み書きは得意な方です。後、美波と
は幼なじみです」

次に体格の良い男子が立ち上がりました。

彼はサッカー部のレギュラー入りした人ではないでしょうか。運動バカですけど、かなり人気があった気がしますね。

『何！島田の幼馴染だと！！？』

『許せん！肅清してやる！』

『秋月を殺せー！！』

それを聞いた男子が立ち上がり、突然叫びました。

な、なんですか？いったい彼らになにがあったんですか！！？

「ちょ、なんでお前ら揃って。上履きを構えてんだよ！！？」

あ、秋月君が慌ててますね。

そうですね、いきなりこれだとそうなりますよね。

「みんな、そんなことしたら、ダメだよ！！？」

慌てて雨宮さんが止めると渋々といった感じで皆さんが席につきました。

あるいみで一件落着ですかね？

「支倉ひばりです。家庭科部所属で、趣味はお料理です。特技は…」

一息あけますと、

「『声帯模写だ』」

秋月君の声でしゃべりました。
凄いですね〜」

「『聞いたばかりの声でも、感情的でなければ、この通りじゃ』」
ついで木下君の声をして。さらに口を開く度に別人の声になっていきました。

「ス……」

呆然とした声を誰かが絞り出しますと、

「「「スゲーーっ!!!!」」」

と、教室は一気に騒然となりました。支倉さんは照れくさそうにしています。

「えっと、雨宮つぐみです。美術部所属で、趣味は料理で特技は……」
こちら一息あけて、

「『ひばりちゃんと同じく声帯模写よ』」

島田さんの声でしゃべってました。

「といっても、ひばりちゃんみたく。できない時もあるけどね」
声を元に戻して雨宮さんが笑いしながら言います。
すると盛大な拍手が巻き起こりました。

「えーっと、吉井明久です。気軽に『ダーリン』って呼んでくださいね♪」

「『『『ダアアーリーーン!!』『』『』」

男らしい野太い声の大合唱が、Fクラスの教室に響き渡りました。流石です、統率力があるにもほどがあります。ノリよ過ぎですよ。

でも、掴みはOKですね！

あれ、どこからかそれは違うんじゃないだろうかという声が聞こえたような。

どこからでしょう？

「吉井冬久です。バカ兄貴とどうように呼んだらぶちのめすから、覚悟しとけよ？

ちなみに、兄貴とは三つ子の兄弟です」

容姿は似たような感じですが、凄みのある迫力で教室内が静かになりました。

冬久君、凄いですね。

「吉井真希です。三つ子の妹です。趣味は料理とアキ兄とフユ兄に手を出した者への報復です。

特技は男性の声と普段の声を使い分けることですかね。」

三つ子ですけど、妹さんは似てないんですね。

明久君と冬久君は似ているようです。

でも、楽しそうな方達です。

仲良くなれるように頑張りましたよ！

おっと、次は自分ですか。

「月野造です。では自分のことは気軽に『ハニー』って呼んでくださいね♪」

「……結婚してくれええええええええええ」

なん、だと。

返事がおかしい、明久君と同じことを言ってるのに同じように返さないなんて。

もしかして、自分のことを女と勘違いされているのでは……？
これは訂正しなくてはいけません！

「あの……自分は男ですよ」

「……それでもいい……」

自分が訂正するように言いますと即答されました。
うう、気分が悪いです。

「そうですか……すみません、忘れてください。よろしくです……」

自分は落ち込みながら言い、座ることにしました。

「僕は芳乃朋です。ちなみに造は僕の婿さんにするつもりなので手をだしたら……許さないよ？」

自分の隣にいた朋さんは笑顔で言うともんでもないことを発言しま

した。

あれ、自分はいつから婿入り決定したんですか！！？

「山崎巧です。『吉井真希とは将来を誓い合った仲です』って、誰や！！？」

朋さんが座ると山崎君が席を立てて無難に自己紹介しようとしたが。

途中で木下君が入り、横やりをいれました。

え、そんなことしていいんですか！？

『兄貴、ひどいぜ』

『そうだよ。俺らの女神をとるなんて』

『信じてたのにつー！』

自分が混乱していると他の男子達がそれぞれ落ち込みながら言っていました。

信じちゃいましたよ！！？

「風宮紅葉です。みんな誤解してると思うから言っけど、僕は男だからね？」

「「「それでもいいっ！！！！」」」

「「「結婚してくれっ！！」」」

あ、紅葉君が立ち上がって自己紹介すると即答されました。
哀愁を感じますね、今の彼には。

雪菜ちゃんがおろおろしていますね、どう慰めようか悩んでいるみたいですよ。

ガラッ

「あの、遅れて、すいま、せん……」

「寝坊しました」

「えっ？」

自己紹介が終わろうとしているそこへ、息を切らせて胸に手を当てている女子生徒と男子生徒が現れました。

第三問（後書き）

感想があるかぎり、頑張って書いていきたいと思います！！

つぐみ「また、見てね」

ひばり「感想、お待ちしてます！」

ありす「次回もちみつこ軍団にうにゃー！！」

つぐみ&ひばり「意味不明だよ！！？」

バカテスト 第三問

問 以下の文を訳しなさい

「This is the bookshelf that my
grandmother had used regularly
y」

姫路瑞希&支倉ひばり&雨宮つぐみの答え
「これは私の祖母が愛用していた本棚です」

教師のコメント
正解です。きちんと勉強していますね。

土屋康太の答え
「これは」

教師のコメント
訳せたのはthisだけですか。

吉井明久の答え
「●」「♪」×
「」

教師のコメント
できれば地球上の言語で。

月野造の答え

「これは それ 本しえるふ あの 私の お祖母ちゃん 持っていた 使った れぐらいい」

芳乃朋のコメント

これは一緒に勉強するかちがあるね。

大丈夫、手とり足とりで教えてあげるから

教師のコメント

なぜ、芳乃さんのコメントがあるのでしょうか？

吉井冬久の答え

『これは私の祖母』

教師のコメント

訳せたのはそれだけですか

吉井真希の答え

これは、私の祖母が愛用していた本棚です。

『アキ兄、それはイタリア語ですよ』

〔教師のコメント〕

正解です。……なんですと!？

第四問

ありすside

「丁度良いですね。みなさんに自己紹介して貰っているところなので、

姫路さんに藤堂くん、あなた達もお願いします」

「あ、はい！ えと、姫路瑞希です。よろしくお願いします……」

「へーい。藤堂辰也だ。よろしく」

わたしやひばりちゃんやつぐみちゃんや造君や朋ちゃん程ではないものの、小柄な身体を縮こまらせ、恥ずかしげに自己紹介する瑞希ちゃん。

白い肌と柔らかそうな長い髪は、いつそ小動物的な保護欲をかき立てるらしいよ。

そして、隣でだるそうにしているのが藤堂君。

成績が良いのに、このクラスに来るなんてどうしたんだろう？

「はい！質問です！」

「あ、は、はい！なんですか？」

登校するなり、質問がいきなり自分に向けられて驚く瑞希ちゃん。その小動物的な仕草が可愛かったりするらしいね。

「なんで二人は、ここにいますか？」

聞きようによつては失礼決まわりない質問が浴びせられたよ。
でも、これはクラス全員が思っている疑問だから、仕方ないけど。

可憐な彼女の容姿は一目を引くし、なにより彼女の学力は入学して最初のテストで学年2位を記録し、その上位一桁以内に常に名前を残しているほどだもんね。

だから、誰もが彼女はAクラスにいるに違いないと思っていた。

「そ、その、ですね……」

緊張した面持ちで体を固くしながら瑞希ちゃんは答える。

「振り分け試験の最中、高熱を出してしまいまして……」

「その付き添いで、振り分け試験の最中に出て行つたんだ」

その言葉を聞き、クラスの皆は『ああ、なるほど』と頷いた。
試験途中での退席は0点扱いとなる。

結果としてFクラスに振り分けられてしまった。

『そう言えば、俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに』

『ああ。化学だろ？あれは高難度だったな』

『俺なんか、事故にあつた弟が心配で集中できなくて』

『ああ、お前には妄想の弟がいたんだったな』

『前の晩彼女が寝かせてくれなくて』

『異端者だ!』

『嘘です! すんません!』

うん、予想以上にバカばかりだね。

「で、ではっ、一年間よろしく願いますっ!」

「一応、宜しくな」

瑞希ちゃんはその言うど藤堂くんの手をひいて明久さんと冬久さんと真希ちゃんがいる方に向かった。

「き、緊張しましたあゝ……」

「そんなに緊張することかよ」

卓袱台にふせて言うど藤堂くんが呆れながら言った。
デリカシーがないなあ!

「辰也くんは緊張しなくてもわたしはするんですっ!」

そう言うど拗ねたようにそっぽ向いた。

可愛らしい態度をとるよねゝ、だから人気なんだけど

「姫路」

そんな時、わたしのお兄ちゃんが声をかけたのです!

「は、はいつ。何ですか？えーっと……」

「新条。新条怜次だ。よろしく頼む」

瑞希ちゃんはお兄ちゃんを見て名前を考えているとお兄ちゃんはすぐに自己紹介をした。

「あ、姫路です。よろしくお願いします。こっちは幼なじみの」

「藤堂辰也だ」

深々と頭を下げて挨拶してから隣にいる藤堂君を紹介する辺り、瑞希ちゃんは礼儀正しいよね！

「ところで、姫路の体調は未だに悪いのか？」

「オレも気に」

「あ、それは僕も気になる」

「あたしも」

「アタシも！」

お兄ちゃんが問いかけると山崎くんが言おうとしたら被せるように明久くん達が喋った。

「は、はいつ。何ですか？」

吉井君に真希ちゃんに山崎くんに冬久くにひばりちゃんにつぐみ

ちゃん!？」

「お、久しぶりだね」

緊張のあまり周りが見えてなかった瑞希ちゃんは、会話に参加してきた、六人の幼なじみに驚いていた。今、気づいたのが藤堂君は笑顔で言った。

「久しぶりだね」

「久しぶりやね」

「元気で良かったよ」

「もう、あの時は驚いたんだからね？」

「久しぶり」

明久と山崎くんと真希ちゃんと冬久くんとつぐみちゃんとひばりちゃんはほっとした表情で笑顔で言う。
本当に仲が良いよね」

「こら、その人達。自己紹介の途中ですよ」
バキッバラッ!!

注意する為に教卓を叩くと見事に壊れました。
それはもうボロボロだったよ。

「……えゝ替えを用意してきます。みなさんはしばらく待っていて下さい」

福原教諭はそう告げると足早に教室から出ていった。

「あ、あははは……」

瑞希ちゃんが苦笑いをしていると、明久がまじめな顔で怜次に声を掛けていた。

「ンわあゝあ。あ？ どうした？ 明久」

怜次は欠伸してたよゝ。

「ここじゃ話にくいから、廊下でいいかな。後、冬久と藤堂と真希と巧も」

「ま、いいだろ」

「わかった」

「仕方ないな」

「らじゃー！」

「おうよ！」

明久は苦笑いを浮かべて言うと怜次は頷いて言うと呼ばれた皆と一緒に教室を出て行った。

「あいつら、仲良いな」

「雄二は参加しないの？」

「そうですよ」

「僕もそれは気になってた！」

雄二は眺めてから呟いたのでわたしが聞くと雪菜ちゃんと紅葉君も不思議そうに見て言ったけど
だるいからしか、教えてもらえなかった。

バカテスト 第四問

問・以下の問いに答えなさい。

(1) $4 \sin X + 3 \cos X = 2$ の方程式を満たし、かつ第一象限に存在する X の値を1つ答えなさい

(2) $\sin(A+B)$ と等しい式を示すのは次のどれか、 $?$ $?$ $?$ の中から選りなさい

? $\sin A + \cos B$

? $\sin A - \cos B$

? $\sin A \cos B$

? $\sin A \cos B - \cos A \sin B$

姫路瑞希と吉井真希の答え

『(1) $X = \pi/6$

(2) $?$ 』

教師のコメント」

『そうですね。角度を $^\circ$ 。』ではなく『 π 』で書いてありますし、完璧です』

土屋康太の答え

『(1) $X =$ およそ 3° 』

教師のコメント

『およそをつけてごまかしたい気持ちもわかりますが、これでは解答に近くても点数は上げられません』

吉井明久の答え

『(2) およそ?』

教師のコメント

『先生は今まで沢山の生徒を見てきましたが、選択問題でおよそをつける生徒は君が初めてです』

支倉ひばり&雨宮つぐみの答え

『(1) $X \parallel 30^\circ$ 』

教師のコメント

『惜しいですが、ニアミスです。』

象限における角度は『 $^\circ$ 』ではなく『 π 』で書いてください』

第五問

「ここでいいか？」

「うん、ありがとう。怜次！んで、話なんだけど」

離れた場所に来ると立ち止って怜次が振り返って聞く。

「試召戦争をしたいんだろう？」

「え、なんでわかるの！？」

怜次がニヤリと笑って言う。明久は驚きながら言った。

まだ、何も言っていないのにわかることになんか驚いている様子だ。

「わかるさ。お前と冬久は幼なじみの為に教室を変えたってこともな」

「「な、なんでそれを！！？」」

怜次が笑って言う。明久と冬久は驚きながら叫んだ。

「アキ兄、フユ兄。わかりやすすぎだもん」

「せやな。顔にでてるからすぐにわかるし」

真希と巧は笑って言った。

「話が脱線したが。試召戦争は俺も起こそうと思ってた」

「え、そうなの？もしかして、ありすちゃんの為？」

怜次が言っていると明久は小首を傾げて聞くと怜次は頷いた。

「他の皆を巻き込むことには辛いけど、やるしかないからな」

「申請しても却下とかされそうだもんね」

ふうとため息をついた怜次が言っていると明久が苦笑いして言った。
いくら従兄弟の甥の頼みでも聞いてはくれなさそうなのはわかっているのだろう。

「Aクラスの設備も凄かったよね」

「もうホテルみたいだったしな」

真希が言っていると辰也が頷いて言った。

「あ、そろそろ。もどらへん？」

「そうだな、先生が来てるみたいだし」

巧が言うと冬久も頷いて全員で教室に入っていく。
そして、再び自己紹介がはじまる。

「えー、須川亮です。趣味は……」

須川の自己紹介が終わると

「Ｆクラスの副代表の坂本雄二だ。俺のことは、ま、坂本でも代表でも、好きに呼んでくれ
後、ありすと雪菜に手を出した奴は俺と紅葉でしばらくからよろしくな」

そう言うと言った。

ちゃっかり脅しもつけている所が雄二らしい。

「最後にＦクラス代表の新条君。君の自己紹介をして下さい」

「了解」

答えて怜次は立ち上がり、ゆつくりと前に出た。
その雰囲気、Ｆクラス中の視線が集まる。

「Ｆクラス代表の新条怜次だ。俺のことは代表か名前で読んでくれ

ればそれでいい」

そう言うところで、少し……間を空けた。間の開け方が上手いやり方だ。

「さて……みんなにひとつ聞きたい」

言いながら皆と視線を合わせる。

そして、流れるように教室各所に視線を移していくと、みんなの視線も自然とそれを追っていた。

カビ臭く、すき間風が通る教室。

古く、うす汚れて綿もスカスカな座布団。

汚れた上に、脚もガタガタな卓袱台。

最後に皆を見据えると口を開いた。

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが……」

ひと呼吸置くと、確認するように告げる。

「不満はないか？」

『『『大アリじゃあつ！！！！』』』』

教室を揺るがす、魂の叫びだ。

「だろう？ 俺だって不満だ。このクラスの代表として、大いに問題意識を抱いている」

怜次は仰々しく同意する。すると、あちらこちらから不満の声があがり始めた。

『いくら学費が安いからって、この設備はあんまりだ！ 改善を要求する！』

『そもそもAクラスだっておなじ学費のはずだ！ あまりにも差が大きすぎる！』

『そうだそうだ！』

それらをまとめ、引き継ぐように怜次は口を開いた。

「みんなの意見はもつともだ。そこで、これは俺の代表としての提案なんだが」

自信たっぷり、素晴らしいほど綺麗な笑顔で、言い放つ。

「Fクラスは、Aクラスに対し『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」

彼、新条怜次は戦争の引き金を引いたのであった。

バカテスト 第五問

問 以下の文章の（ ）に正しい言葉を入れなさい。
『光は波であって、（ ）である』

姫路瑞希と雨宮つぐみと支倉ひばりと月野造の答え
『粒子』

教師のコメント
『よくできました。』

土屋康太の答え
『寄せては返すの』

教師のコメント
『君の解答はいつも先生の度肝を抜きます。』

吉井明久の答え
『勇者の武器』

教師のコメント
『先生もRPGは好きです。』

新条ありすの答え
『闇と対なる』

教師のコメント

『ファンタジーな問題ではありません。
というよりわざと珍回答をしていますか？』

坂本雄二の答え

『眩しいもの』

教師のコメント

『違います。』

坂本雪菜の答え

『サイコパワー』

教師のコメント

『先生も昔は懂れていました。
』

秋月終夜の答え

『殺人ビーム』

教師のコメント

『真面目にやってください』

吉井冬久の答え

『心である』

教師のコメント

『周りに合わせて珍回答は止めてください』

吉井真希の答え

『真心である』

教師のコメント

『良いことを言って終わらせようとししないでください』

風宮紅葉の答え

『微粒子』

教師のコメント

『わざとですか？』

第六問

紅葉 side

Aクラスへの宣戦布告。

それはこのFクラスにとっては現実味の乏しい提案にしか思えないよね

『勝てるわけ無いだろう』

『コレよりひどい設備なんてあり得ない』

『姫路さんがいれば何もいらな』

『真希ちゃんを抱きしめたい』

『雪菜ちゃん、らぶ!』

『ひばりたん、かわゆす』

『つぐみたん、嫁にきて!』

『紅葉ちゃんがいれば幸せだ』

『造ちゃんもいるなら本望だ!』

そんな悲鳴が教室内のいたるところから上がっています。

一部おかしなセリフも交じっていたが、気にしないようにしよう。じゃないと落ち込むし。

確かに誰が見ても、AクラスとFクラスの戦力差は明らかなんだよね。

文月学園では、点数の上限がないテストが採用されているし。

一時間の制限時間内に、無制限にテスト問題を解いていくことができる。

テストの点数に上限はなく、能力次第でどこまでも成績を伸ばすことができるというわけ。

そして、科学とオカルトと偶然から生まれた、『試験召喚システム』これは、テストの点数に応じた強さを持つ。

『召喚獣』を呼び出して戦うことのできるシステムで、教師の立ち会いの下で行使が使用可能になる。

学力低下が嘆かれる昨今、生徒の勉強に対するモチベーションを高める為に提案された先進的な試み。

その中心にあるのが、召喚獣を用いたクラス単位の戦争………試召戦争と呼ばれる戦い。

その戦争で重要なのがテストの点数だ。AクラスとFクラスの点数は文字道理桁が違うわけで。

正面からやりあっても、Aクラス一人に対してFクラス三人でも勝てるかどうかは分からないというわけなんだよね。

どうあがいても勝つことなど不可能としか思えないのですが、どうする気なのかな。

だが、怜次はそれを否定してみせるような言葉を発言しました。

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、勝たせて見せるさ」

圧倒的な戦力差を知りながらも、怜次はそう宣言したのです。

『何をバカなことを』

『できるわけないだろう』

『何の根拠があつてそんなことを』

『そんなことより、真希ちゃんを愛でたい』

否定的な意見が飛び交うが、また、おかしい意見も出てきたよ。
いったい誰なのかな？

「根拠ならあるさ。このFクラスには試験召喚戦争で勝つことのできる要素が揃っている」

「要素？」

怜次が自信満々に笑つて言うと雪ちゃんが呟やいた。

「それを今から説明してやるよ」

得意の不敵な笑みを浮かべ、壇上から皆を見下ろす怜次。
ゆーくと違い、どこか自信にあふれた感じがする

「おい康太。畳に顔つけて姫路達のスカートを覗いていないで、前
に出てこい」

「……………！！（ブンブン）」

「ひゃわっ」

「わわっ!？」

怜次に呼ばれた少年、土屋康太は必死に顔と手を横に振って否定した。

瑞希ちゃんと雪ちゃんが慌ててスカートを押さえて離れると、顔についた畳の痕を気にしながら壇上へと歩き出しました。

「土屋康太。こいつがあ有名な、寡黙なる性識者だ」
ムツリーニ

「……………!!(ブンブン)」

『ムツリーニ……………だ……………と?』

『ヤツがそうだというのか?バカな……………』

『だが見ろ。ああまで露骨な覗きの証拠を、未だに隠そうとしているぞ……………』

『ああ……………まったくだな。ムツリの名に恥じない姿だ……………』

畳の痕を手で押さえている姿が果てしなく哀れを誘う。

「「???」」

瑞希ちゃんと雪ちゃんだけが、訳が分からないという顔で首を傾げている。

いつまでも純粋な雪ちゃんदैいてね

「姫路は説明不要だろう。その実力はみんなが知っている通りだしな」

「えっ！ わ、私がですかっ？」

「ああ、ウチの主戦力だ。期待している」

突然に話をふられて慌てる瑞希ちゃん。

『ああ、そうだ。俺たちには姫路さんがいるじゃないか』

『たしかに彼女ならAクラスに引けをとらないな』

『まったくだ。彼女がいれば、ほかに何もいらなないな』

『真希たん、かわゆす!!』

『雪菜ちゃん、嫁に来て〜!!』

さきほどから、瑞希や真希ちゃんと雪ちゃんにラブコールを送る輩が増えているんだけど、どうしよう。

「木下秀吉だっている」

「む？ ワシか？」

『おお……!!』

『確かアイツ、ここにいる木下優子の……』

「当然、この俺も全力を尽くす」

『確かに何かやってくれそうな雰囲気があるよな』

『そういえば、新条って西多摩で有名な奴で小学生の頃から神童だ
って噂が』

『てことは、振り分け試験の時は体調不良かなんかだったのか』

『なんだよ、Aクラスレベルが3人もいるんじゃないか、このクラス』

いけそうだ、やれそうだという雰囲気は教室内で満ちている。

「それに、Cクラス並の成績を持つ。吉井明久とBクラス並の成績
を持つ冬久だっている」

ニヤリと笑ってそう言った

『真希ちゃんの義兄様達のことか!』

『真希ちゃんには劣るけど、成績が途中からあがったんだっけ』

ざわざわとクラスメイトが騒いだ。

「それに明久達は《観察処分者》だ」

『それって、バカの代名詞じゃなかったか?』

「うーん、傍から言われるとそうなんだけど。ちょっとした騒動でなったわけだから」

「だから、バカの代名詞という理論だけじゃないんですよ」

真希ちゃんが笑顔で言う辺り、周りのざわめきが静かになった。

「あの、『観察処分者』というのはどういうものなんですか？」

手をあげて瑞希ちゃんが聞いた。

「具体的には教師共の雑用係だ。力仕事とかそういった類の雑用を、特例として物に触れるようになった試験召喚獣でこなすといった具合だ」

本来試験召喚獣は物に触ることが出来ないけど観察処分者である明久と冬久のだけは特別使用。

「そうなんですか？それって凄いですね。試験召喚獣って見た目と違って力持ちって聞きましたから、そんなことができるなら便利ですよね」

瑞希ちゃんは笑顔で言う。

「あはは。そんなたいしたもんじゃないんだよ。教師の監視下でなければ呼び出せないし、試験召喚獣が受けた負担の何割かがフィードバックして返ってくるんだよ」

つまり重いものを明久の試験召喚獣に持たせて校舎内を走り回らせればその疲労が明久と冬久に返ってくるわけなんだよね。

『おいおい。《観察処分者》ってことは、

試召戦争で召喚獣がやられると本人も苦しいってことだろ?』

『だよな。それならおいそれと召喚できないってことだよな』

確かに普通の《観察処分者》ならその通りですがしかし…

「おいおい、さっきも真希が言ってただろ? 明久の成績はCクラス並で冬久はBクラス並だ。

そんな明久と冬久がおいそれと簡単にやられると思うか? ましてや《観察処分者》なら他の奴よりも召喚獣の扱いに長けている。

《観察処分者》と高得点、この2つがあるから明久と冬久はクラス最強なんだ」

「怜次、あんまり褒めないでよ。照れちゃうよ」

「なんか、むずがゆい」

明久と冬久は照れているね。

「そして、（特別処分者）というのは知っているか?」

「確か、今年の成績はいいのに普段の生活態度が悪い奴にあたえられるという」

「そうだ。吉井真希はその称号を持っている。」

『なんだって!?!』

『高成績でその称号を持つ奴がこのFクラスにいたとは!?!』

ざわざわと騒がしくなる。そもそも特別処分者というのは観察処分者とかわないんだけど。

違う点があるというなら、召喚獣に召喚者の意識が乗り移るみたいな感じになるんだ。

あ、本来の肉体も操作可能なんだって。

意識が二つにわかれて召喚獣と本来の肉体にも意識があるというしくみだね。

肉体が無防備だと万が一のこともあるからね

「まずは小手調べにDクラスを攻め落とす」

「みんな、今のこの境遇には我慢がならないだろう?」

『当たり前だ!?!』

「ならばペンを執れ! 出陣の支度を始めるぞ!」

『おおーっ!?!』

「「お、おー……」」

周りに流されながら瑞希と雪ちゃんが腕を上げます。
僕も頑張ろうかな

第六問（後書き）

感想と評価をお待ちしております！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7719w/>

ちみっこ団と三つ子と召喚獣

2011年10月26日14時06分発行